

クラチュロス主義の乗り越え

—— マラルメの『英単語』の場合 ——

立 花 史

Retardant l'étude de ce que *les*
Mots anglais doivent encore à la
linguistique historique...

Derrida

1970年代、構造主義言語学の内部で、恣意性と動機付けの関係が議論された折に、文学におけるクラチュロス主義の主題は、或る程度議論されている⁽¹⁾。動機付けの問題を文学史の中で研究したものとしては、例えばジュネット [1976] やトドロフ [1977] があり、前者はマラルメのクラチュロス主義を正面から扱った稀有な論文であるが、マラルメ研究を牽引したのはむしろ、19世紀の言語学や神話学との関係の究明 [ルノー1973、ミション1978]、そしてその集大成であるマルシャル [1988] の方であろう。こうした研究では、マックス・ミュラーによる神話的形象の自然主義的説明に基づき、マラルメ詩学における抽象化や気化の主題に比重が置かれ、クラチュロス主義の主題は大幅に退潮している。それは例えば、マルシャルが、「詩の危機」で jour と nuit の音声的イコニシティを指摘した有名な一節を、明暗や黒白の対照性の観点からしか説明していないことに顕著に表れている。もっとも、マルシャルは近年、彼の神話論的解釈から、マラルメの詩学における対象指示の問題を研究している。これは、コンブ [1998]⁽²⁾の研究にも見られ、構造主義の言語学や記号論の影響下にあった従来の文学研究において十分に扱われなかった主題の復権の意味もあろう。そこで本稿では、「言語に関するノート」と『英単語』を同時代の言語学の趨勢と対照しつつ読み解き、マラルメ詩学において、対象指示の問題が、動機付けの問題と、あるいは抽象化の問題とが取り持つ関係を闡明することにする。前半部では『英単語』に見られる詩人の言語観を再論し、後半部では、「ノート」との関係性を述べる。最後に、マラルメの言語観を同時代の言語学の中で位置づけることにする。

コンテキスト

当時における『英単語』という著作の位置づけを把握するためには、方言の重視、文法学と語源学の関係、人間学と生物学の関係について確認する必要がある。

——方言の重視。まずシュライヒャーとミュラーは共に、言語の発展を先史時代と有史時代に区分する。先史時代は言語が単音節、膠着、屈折と形態論的に進化し、有史時代に入ると、文化の中央集権化による国語の制定や文字言語の発達によって音声面で解体の一途を辿り、文法面でも合理化され、もっとも有機的で精緻な体系をもつ屈折言語が人間の利便によって簡素化されてゆくと考えられた。文字言語はエルゴンにすぎず、生きた言葉こそがエネルギーであり言語の様々な発展の原動力である。比較言語学においてシュライヒャーが方言を重視した最初の学者と言われるのはこのためだ。またミュラーによれば、公式言語は派生の母体となる言語ではない。イタリア語の起源は、ラテン語の古典文献そのものというよりイタリア方言だった。英語も、ウェセックスのアングロ＝サクソン語だけでなく、グレートブリテン各地で話されていた方言でもある。彼は方言という言葉で、いわゆる狭義の方言だけでなく、特定の階級や職業の言葉からギリシャ語やラテン語やフランス語のような言語まで含めて、実際に話されている言語一般の意味で用いている。SLにおいて、政権転覆による公式言語の交代を例に、下層や外国の言葉が公式言語に採用される経緯を述べている。マラルメの『英単語』という著作もまた、こうした当時の言語学の趨勢を如実に反映している。序論の第一章で、言語の三種類の形成に言及しているからである。一つ目は、「自然な或いは民衆的な形成」であり、二つ目は、「教養人たちがまがいのもの規則に従って好きなように」行った「人工的で学者的な派生」(950)である。これは、「多かれ少なかれ人工的で学者的に整備され刈り込まれた文字言語とは対照的な、自然のまま、言語変化の法則によって生成した諸形式をもつドイツ語」というシュライヒャーの言葉とも酷似している。『英単語』が掲げる三つ目の変化とは、「絶対的に人工的でも自然的でもない言語変化(…)ほとんど完成した言語の中にほとんど完成した別の言語が注ぎ込まれるという変化」(962)であり、この著作の記述の中核をなすものである。このように、いわゆる通常の言語変化、そして文字言語における言語変化、さらに地理的・社会的な影響による変化の三つは、自然科学としての当時の言語学が重視した方言の問題系の中に納まっているのである⁽³⁾。

——語源学の刷新。ミュラーが言語社会学的な問題を記述したとき、そこで例示された言語の変化は語彙の変化であった。このことは重要である。音変化や文法構造の変化が緩慢なのに対して、語彙は社会内部の変化や、社会相互の影響関係を受けやすい。語彙の変化は、もっとも歴史的偶然に晒された言語学的対象である。19世紀以前の言語学が文献学であり人文科学の一部であることが自明視されていたのは、文献学が主に文学作品や語彙を中心的に扱っていたからである。だが科学を標榜する言語学は、語源学にも及んでいる。NSL1でミュラーは、科学的な語源学として「語の変化を扱う科学」(354)を提唱している。従来の語源学が意味や音の類似から恣意的に導き出されたものだったのに対して、彼は、音や形の類似性や同一性による推測ではなく、音法則の規則的变化に基づいた語の変遷の研究を行うべきだと考えていた。語彙の研究もまた、当時の言語学の中に統合されつつあったのである。ただし、ミュラーは「言語の科学」の最右翼では

ない。彼の言語学が理性の具現物としての言語を、その生理的基盤である発声器官の合法則性から研究するものであったのに対し、例えばプロカ周辺に集まった在野のフランス自然主義言語学一派はむしろ、言語能力そのものを脳の機能と見なして生物学の一部として言語研究を行っていた。むしろミュラーの人間学は、彼の神話学から想を得て、人間の集団的知性の引き起こす言語変化を扱った、文献学者ブレアルの歴史意味論に受け継がれることになる⁽⁴⁾。

分 析

さて、『英単語』で不評なのが、イニシャルの意味付けである。『英単語』は、アングロ＝サクソン語直系の語（お国言葉）を扱う第一巻、フランス語からの輸入語を扱う第二巻、ラテン語およびその他の外国語からの輸入語を扱う第三巻を含むが、第一巻はさらに、単純語、接辞、合成語の三部（実質二章）に分かれている。そのうちイニシャルの意味付けは、お国言葉の単純語を扱う第一巻第一章に位置する。言語に言語が注ぎ込まれる第三の形成を中心的主題とする『英単語』において、お国言葉は列挙する以外に扱いようがないと言いつつマラルメは、読者に馴染みのないアングロ＝サクソン語における「語の意味とその外面的布置の間に実在する関係」（965）について知見を深めるために語の分類を行っている。それが「縁語」による分類であり、その縁語をイニシャルごとに配列したのが、例の一覧表なのである。従来この一覧表は、神秘主義的な文字の神学や、文字の音とその意味との間の形式的類似を目指すクラチュロス主義的試みと解釈されている。これを再論するためにこの一覧表を精読しよう。

縁語はどのような基準で分類されているのだろうか。マラルメは語の意味と音とが縁語の分類の二つの指標だと言う。しかし意味だけで *dry* や *thirst* を縁語とするわけにはいかないのは当然だが、とはいえ *mow*（刈る）と *mow*（干草）を縁語にしてもならないと言う。両者は語の成り立ちが異なり「まったく外面的な類似」（966）でしかないからである。従って一覧表の分類は原則として、語源的な基準に基づいている。語源的繋がり、縁語において各語の主要な意味同士にほとんど類縁性がなくとも、語が「一般的で総合的な意味」という共通の部分を巡っていることを示している。それは特定の文字に具現化された意味概念のさまざまな派生の中に位置づけられる。ただしマラルメはさらに細則を設け、単純な語源的分類になってはいない。「目に見える類縁関係」（965）を英語以前に位置付けるべきではないからである。英語に入ってきた時点でそれとわかる類縁関係がそのまま維持されている場合のみ、語源に従うべきだと細則は命じている。

ところで、こうして作成された縁語の数が2、3個でも数千でもなく数百だとされているのは興味深い。これは当時、語根の数が500から600とされていたことと合致するからである。厳密に語源的な研究を進めれば、語根の派生や語形変化が考慮に入り、数はずっと増えるはずなのだが、そうした過度の厳密性を回避することによって逆に英語内部の縁語を数百にとどめている。あたかも英語独自の語根とでも言うものを想定しているかのようだ。事実、マラルメは一覧表の作成

に当たって語根を十分に意識しており、むしろ語根の相対化を行っている。一つ目の相対化がこれである。彼は、一覧表の後に、縁語と語根の關係に言及している。最古のアーリア語であるサンスクリットは500ほどの語根を持っており、言語の分析は、その始まりと終わりを調べればよいように見える。しかし彼によると、厳密に言えば、語根というものはもはや存在しない。というのも、語根そのものは古代言語にしか存在せず、これに照準を合わせると、英語以前の言語を果てしなく遡らなければならなくなるからである。一言語の中に見出せるのはせいぜい語根の実現形であり、つまり「概念や相」(1015)を単に表わす「語基」のみである。しかしその語基の同一性を支える概念や相でさえ、それほど確固たるものではない。

マラルメに拠れば、語基に意味概念の拡張が起こってより広範な縁語を形成することもあれば、語基の意味が弱まって「文彩的な痕跡」になってゆくこともある。純粋な語基から純粋な接辞まで連続的に「幾多の形式的な補助物」が無数の段階をなしているのだ。語基の中に「語の価値を変更する内的変化」を見出すことさえ可能である。と言うことは、彼の作成した一覧表も、語基の接辞化を考慮したものになっている。だからこそ、縁語の共通項が、「原初的な意味や現在ほとんど用いられていない意味」(969)になることもあるし、縁語の下に集められた語同士が、thrash と threshold のように「非常に遠くからやって来た」(966)かのような印象を与え、sneer と snow や heavy と heaven のように、時には「不一致」や矛盾に思えることさえあるのだ。また先述の二種類の mow のように、同音で意味が近いにもかかわらず縁語と見なさない場合もある。いずれにせよ、活用が少ないがゆえに語基を剥き出しにした英語の特性から、我々は語の与える印象を手探りにあくまで英語の内部で、縁語を発見してゆけるのだとマラルメは考えている。『英単語』での研究を、煩瑣な語根分析に足を踏み入れずに、あくまで英語に限定したのは、また本書で「記憶」や「記憶術」⁽⁵⁾が強調されるのは、英語話者の語感つまり英語の中で培われた音と意味との結合の効果を基準にし、縁語リストの作成によって英語に習熟するというこの著作の狙いがあるからである。『英単語』の一覧表を参照してみよう。一覧表は、左端にレギュレータとなる語を置き、その語を中心に縁語をなすと考えられる語群を右端に置いている。

A. to raise, lever (*exhausser*).

to rise, *se lever*.

to rouse, *réveiller*.

to rear, *élever*.

B. to rock, *bercer*.

to wriggle, *tortiller*.

Aの場合、マラルメの書齋にあった『チャンバース英語語源辞典』によれば、raise は中世英語 *re-isen*、古英語 *risa* の原因格 *reisa* に由来するとあり、rise も当然、古代ノルマン語 *risa* と関係があり、古英語 *risan* に由来する。また rear は、古英語 *risan* の使役態 *raeran* とあり、rouse に関し

ては語源が不詳となっている。「英語という言葉の中にやって来て長らく意味のほとんど変わっていない複数の語」(965)は縁語に入れるという冒頭の原則に適っている。他方でBの場合は、レギュレータと縁語がまったく語源を異にする。レギュレータの rock は、古英語 *roccian* に由来するが、*wriggler* は *wrig* の反復相であり、これ自体 *wrick* の変異形で、中世英語 *wrikken* に由来する。しかしこれら [rok] と [rig] の音に、揺らす／捻るという動作を意味する観念が読み取れると彼は言う。

だとすると、ここで擬音語の問題が浮上してくるのも当然である。通常の語をさしあたり語基語と呼ぶなら、語基語は語基と接辞を持っており、音と一般概念との結合の効果を持っているのに対して、擬音語は全く異なる構造の語だからである。語基語が語基という「貴族的で太古の称号」(967)を与えられた存在である一方で、擬音語は言語創造の方法としては原初のものであるのだが、伝統を持たず、つい最近現われたかのように、ただ現実の音との「完全な繋がり」を示すのみである。従って語基を持たない擬音語は、語源的には縁語を構成しないのは当然である。しかしマラルメは、「論理的には」そうは言えないと言う。擬音語を縁語に含める「論理」を語る時、彼の説明には人を驚かせるものがある。通常のように、擬音語もまた語基語のように概念や相を持っているのだとは言わずに、語基語の方が、擬音語と同様、「アルファベットのただ一つの文字と幾千の意味」の間に何らかの類似性を持つのだと言うのである。擬音語が概念的であるという理由ではなく、語基語が模写的であるという理由から、そうした語基語が縁語を構成する以上、擬音語も縁語に含まれる、そうマラルメは考えているのである。もちろん全ての語が模写的であるわけでも、全ての擬音語が縁語に入るわけでもない。一覧表が語基による分類である以上、模写的でない語があることを認めているし、また *fillip* や *giggle* といった擬音語 (967) が縁語を構成しないことも指摘されている。だがそれにもかかわらず彼が語基語に模写的な特性を見出しているのはどういうわけだろうか。

マラルメのこの言葉を説明しようと考えたら、二つの可能性しかないように思われる。語基語が元々、擬音語から派生しているか、擬音語が語基語の意味論的效果に依存しているかである。前者である可能性は殆どない。というのも彼は、語基語が語基による縁語を構成していると考え、語基語と擬音語は「歴史的に」起源が異なることを認めているからである。では後者と考えるべきだろうか。擬音語は実際にどのように縁語を形成しているのか確認してみよう（紙幅の都合で縁語を一例に表記しておく）。

C to romp, *batifoler*. [ramble, *promenades* / to rap, *frapper vivement*(...)]

D to hum, *bourdonner*. [humble(bee), *chèvrefeuille*. / to hint, *suggérer*]

D' ugh! *fi!* [ugly, *laid*]

E clock, *horloge*. [to clack, *claquer* / klick, *claque* / to click, *faire tic-tac*]

まず一番多いのがCのように、縁語の一つに擬音語が含まれている場合である。特にCでは、rompの浮かれた気分で動き回る意味においてrambleと繋がり、具体的な動作の面で、rapとつながっていると言うことだろう。逆に一番少ないのが、Dのように、擬音語自体がレギュレータになる場合である。擬音語ではないが間投詞がレギュレータとなるD'も含めて、擬音語や間投詞がレギュレータとなるのは全体で数える程であり、当然、縁語関係にもかなり飛躍が見られる。これは擬音語や間投詞においては意味概念の一般化の度合いが低いことによるものだろう。Eはその極端な場合であり、擬音語は、同じような音を表わす縁語しか構成していない。

こうして、イニシャルごとに縁語を列挙した後、今度は、各縁語の持つ語基の意味が、イニシャルの持つ包括的な意味として記述されている。重要なのはこの手続きの順序である。包括的な意味が先に提示されてその後に事例の資格で各縁語が列挙されるのではない。少なくともそういう体裁はとってはいない。例えばRの場合、「上昇や、誘拐によって達成された目的、充実」を表わし、また「擬音では引き裂く音になり、文字の重要性そのものによって、何か語根的なものを示す」(1010)とある。これは明らかに、それぞれraiseやride、robやreave、ripeやreapやrifeから、また擬音の意味で解釈されたriveの意味を確認した上で述べられたものであり、実際、マラルメがイニシャルに与えているのは、縁語の語基を緩やかに結んだ意味の羅列にすぎない。イニシャルの意味とはアプリオリなものではなく、英語の言語の歴史と英語話者の記憶と知性によって帰納的に導かれた「一般的で総合的な意味」なのである。一覧表において、擬音語が意味の一般化が微弱であるがゆえにレギュレータの位置を占めることが少なく、大抵は縁語の一項にすぎなかったように、ここでも擬音語は、イニシャルの意味の派生の一部にすぎず、結局、擬音語の音は意味論的な側面で総括されている⁽⁶⁾。イニシャルの次元では、もはや語基語か擬音語や間投詞かという区別は問題になっていない。イニシャルは、両者を統合した意味を担うのである。しかもそれは、イニシャルが何か神秘的な象徴機能を帯びているからではなく、我々の日常的な英語使用がイニシャルにそうした意味を自然と沈殿させているからである。

だがそうすると、やはりマラルメが言っているのは、多かれ少なかれ、擬音語もすでに一般概念化をこうむっているということになりそうだが、そう単純ではない。確かに、一覧表の前に、擬音語以外の語もまた「形と意味との類似を一つならず示し、「アルファベットのただ一つの文字と幾千の意味とが持つ関係が、当然お互いの間で或る種の類似を見せる」(967)のだと語られていた。一覧表のイニシャルは、語基語も擬音語もすべて意味論的に総括していたのに対して、一覧表以前の記述はむしろ、語基語の方が擬音のように形と意味の類似を持ち、擬音語の側に置かれていた。語基語が模写的なのか、擬音語が概念的なのか、どちらなのだろうか。マラルメは明言していない。そこに詩人の不徹底を見ることもできるかもしれないが、しかしこれはそもそも結論の出ない問いではないだろうか。例えば、同時代のマックス・ミュラーにも同じような不

決定は見られる。ミュラーは、SLの第9講で、人間の理性的言語は、動物にも可能な擬音語や間投詞とは異なり、語根によって概念分節された言語だとし、擬音語や間投詞と理性言語を截然と区別した。擬音語から生じた語 (ex. coucou) は、語根から生じた語 (ex. corbeau) とは異なり、前者は古代語の対応物を見ても、グリムの法則を受けず、意味の一般化にも乏しいことを根拠に上げている。しかも彼は、質的に区別するだけでなく、語根の絶対的な恣意性を強調して、語根が成立においても擬音語と全く異なり、語根は語根自体として突然人間に生じていたのだとまで語っていた。しかし3年後に行われた講義録 NSL2では、「砕く」を意味する語根 mar の形成について捻れた前言撤回を行っている。「砕く」を意味する擬音は、mar とは別様にいくらかでも表現できる。ミュラー自身が例に挙げているように、kar でも tar でも char でも glar でもよかったのである。mar が語根になったということ自体に何の必然性もない。ミュラーはここにダーウィンの自然淘汰概念を導入している通り、利便に従って淘汰が生じたにすぎない。だとするなら、擬音語と語根は質的に連続していることを認めざるを得ないはずである。だがミュラーは、語根成立以前を、人間が人間になる以前の場面として区別し、語根成立後の観点から、語根と擬音を峻別している。しかも同時に、我々が音に与える性格は、「我々が話しているか或いは知っている言語の影響を密かに受けている」(25) として、語根成立後も擬音が語基語によって方向付けられる可能性まで示唆している。結局ミュラーは語根そのものを質的にも歴史的にも擬音語と区別することに失敗してしまっているのである⁽⁷⁾。

マラルメの一覧表に戻ろう。彼の「論理」に従えば、擬音語が縁語の中に組み込まれるということは、いまだ音声的模写の側面を強く残す語が、音と観念との結び付きである語基語と相互作用を起こしようということだ。ましてや、頻度こそ少ないにせよ、擬音語は時にはレギュレータの役割さえ果たすこともできるのである。語基語と擬音語はお互いに影響を及ぼしあっているならば、すべての語は概念的であるが、同時にすべての語は模写的であることにならないだろうか。語基語と擬音語が、音声という同じ素材を使って人間の言語活動を行う以上、両者は截然と区別できず、解きほぐしようもなく混ざり合ってしまうのである。ここに、語根や語基に対する第二の相対化がある。語基語が擬音語の影響を受けて、その語源とは別に模写的な音を帯びたりあるいはそうした語が選択されたりするのか、あるいは我々がすでに持つ語や言語が喚起する音と観念との結び付きが、擬音語に一定の動機付けを与えているのか、言語を持つことによってしか思考できない人間には問うてもしかたがない。言語は、模写的な印象を与えうるし、また概念的な印象も与えうるのである。これは突き詰めると、人間が聴覚で受け取り、発声器官によって発音する音そのものが、人間の構造自体に由来する以上、恣意的であると言えるし、またその恣意性の中でのみ音声の模写も可能になると言えるということなのだ。「全体的な意味とある文字との間の関係は、もしそうしたものが実在するなら、それは、語において、発話のために、しかじかの器官を特別に用いるためである」(969) とマラルメは結論している。

ところで、語基語と擬音語が峻別できず、言語において、語基語と擬音語がさまざまに連れ合いながら、両者ともに、イニシャルを中心に包括的な意味を喚起する時、まさにそこに文字芸術の介入する余地が生まれる。一覧表直前の「注意」によると、縁語において、「共通の起源以来しばしば寄り集まっていた後に、離れ離れになった語たちが、あなたがた読者の反省のおかげで、一定の整序の下に考慮された言語の或る状態の中で、再び寄り集まることありうる」のである。マラルメは、この時「英語は精神にとって美しくなる」と言う。つまり擬音語と語基語が、或いは模倣的な音声と、観念と結び付いた音声とが、言語活動の中で自然に影響を及ぼし合って、歴史上そのつど、或る特定の形に整序される。そこに美がある。だが言語の美は自明のものとしてそこにあるのではなく、人間が或る面では意識的に、或る面では無意識的に行う言語活動の中で偶然形成される。音と観念との繋がりを、注意深く除去したり寄せ集めたりすることで初めて見出されるのである。こうした作業は、単に言語の歴史を辿るだけの従来の比較言語学的な観点では捉えきれず、「文学的な観点」(967)の導入が要請される。「高等で自由な本能によって、遠方からのように偶然に到来するがゆえに一層みごとに言語の魅力と音楽に寄与するように語同士を寄せ集めるのは、詩人や巧みな散文家の役目」なのだ。もちろん「遠方からのように」はあくまで「ように」であって、論理的には遠方ではない。同じ語根に由来していたり、さらには同じイニシャルの下に包括される同種の観念を持っていたりするのであり、それゆえ、その縁語関係を見つけ出したときに美が感じ取られる。こうした手法が「頭韻」である。詩人は、単に意味や観念によってこの世界の何かを語るのに甘んじるだけではなく、その意味内容を音の統一によって整え、意味内容と音との関係の偶然的な「整序」を露にするのである。

Pareil effort magistral de l'Imagination désireuse, non seulement de se satisfaire par le symbole éclatant dans les spectacles du monde, mais d'établir un lien entre ceux-ci et la parole chargée de les exprimer, touche à l'un des mystères sacrés ou périlleux du Langage (...).
(p.968)

文脈から言って「象徴」は、イメージで形象化された意味概念に関わり、世界の光景と言葉との繋がりは形式面に関わることはわかる。詩人は単に世界の光景を象徴に形象化するだけではなく、語と光景との繋がりを樹立しようとする。重要なのは、象徴の形成と繋がりの樹立はまったく関係のない操作ではなく、概念的な象徴の形成の上でさらに繋がりの樹立が置かれていることである。詩人は単に何かを語るだけではなく、頭韻を用いて音を調整する。イニシャルに沈殿した意味や概念のおかげで我々は、頭韻によって整備された語の配列の中に音と観念との、偶然的に形成された法則性を発見することができる。それはイニシャルの意味が、擬音語の内容も語基語の内容もともに包括していることによって可能となっている。しかし擬音語と語基語はともに概念

的であるだけでなく、ともに模写的でもある。頭韻を踏む文は、その音の喚起力によって世界の光景との間の繋がりという印象を与えうる。なるほどこの「繋がり (lien)」は、擬音語のように「語の意味と形式とのかくも完全な繋がり (lien)」(967) ではないのだが、やはり模写的な要素を持っているために一定の繋がり形成される。とは言えこの繋がり、あくまで「想像力」の産物であり、繋がり効果でしかない。我々には、何が模写的で何が恣意的かを決定することは不可能なのだから。そして、すべての語が模写的であると同時に概念的でもあるということは、イニシャルの意味論的な記憶に従って頭韻を踏むことが同時に、現実との繋がり効果を生むことでもあるという奇妙な事態を認めることである。だからこそマラルメは、繋がり樹立について語った後、そのままイニシャルの絶対的な意味の水準に移行し、繋がり樹立を試みる大詩人の創作が放つ「微光」(968) を頼りに、この絶対的な意味を探求するという当面の可能性を示唆しているのである。

「ノート」との関係

ここで、1870年前後に書かれた「言語に関するノート」との関係を見ておこう。マラルメは言語の中に、抽象と虚構の二つの作用を見ている。抽象とは個物を抽象して一般概念を形成する活動であり、虚構とは特定の音と特定の概念とを結合する活動である。言語が虚構の結合を前提とする以上、言語活動とはまずもって発話された会話にあり、言語学の対象も会話にある。抽象と虚構によって構成された語は、一般概念にさまざまな接辞を伴って類語や縁語を形成する。観念の類縁性は、音の類縁性で具現化される。「音のアナロジーによって事物のアナロジーを創造する」(f1) とは、こうした語根と接辞の関係を考えると明白である⁽⁸⁾。では抽象(所記/指示対象)と虚構(所記/能記)の関係はどうなっているのだろうか。彼は、「対象に関する〈概念〉の契機は、それゆえ、対象の対象そのものとしての現前的反省つまり対象の現前の純粋性における反省の契機である」(f11) と述べている。対象の概念とは、対象がそのものとして現前する姿、対象の純粋な現前の姿を反省することである。ここで「対象そのもの」と述べられているのは、歴史的地理的な拘束性を離れたものとしての対象であり、それは一般化された対象であろう。マラルメにとって、対象の概念とは、一般化された対象が精神の中に映し出された姿であり、概念形成とは、個別の対象をその「現前の純粋性」において見出すことである。ここでは対象の一般化と一般化された対象とが同一視され、理念化された指示対象が所記と見なされている。そして、この所記と指示対象の混同によって、音と指示対象の動機付けの問題が拓かれている。『英単語』のマラルメが、擬音語を、意味と音との繋がりとして理解しているのはそのためである。

しかし同時に『英単語』では、動機付けの観点から、ノートにおける対象の一般概念と一般的対象との関係を問い直しているのも事実である。というのもノートで同一視されていた所記と理念的指示対象が、『英単語』では、音と意味に必ずしも繋がりのない語基語の表現内容と、音と意

味に繋がりのある擬音語の表現内容とに分離しているからである。第一の相対化は語根と接辞との区別を緩め、第二の相対化は語根と擬音との区別を緩めている。第一の相対化によって語源に拘泥せずに縁語形成を記述することで、そこに擬音を関係付ける第二の相対化が可能となる。最終的にあらゆる語は概念的であると同時に模写的であることになるのだろうが、これはノートにおける同一視とは異なる。『英単語』の見解は、所記を表わす理想的な語基語と、理念的指示対象を表わす理想的な擬音との間のグラデーションとして、あらゆる語を位置づけ、記述しているからである。言語の概念が、語基語と擬音語に分裂した両極端の全幅に変容したことで、ノートにおいて顕著だった言語の認知機能の側面が後景に退いている。しかもそれによって、理念的指示対象としての所記から具体的な指示対象への移行がなくなり、所記と理念的指示対象の間だけに議論が収斂している。我々にとって何が模写的で何が概念的かを決定できないということが、具体的指示対象への経路の消滅に相当する。ただしこれは、科学的営為の否定ではなく、純粋なクラチュロス主義に対する否定である。あらゆる語が概念的である以上、個々の語によって個々の具体的指示対象を模写できず、概念を示す語の配列や対照の中でしか、音と観念との結合の規則性を確認しえない。それゆえ詩人が言葉と世界の光景の間に繋がりを樹立しようとする時、特定の語ではなく、頭韻を踏んだ言説に頼ることとなる。マラルメにとって、これは語の欠陥を文で贖う⁽⁹⁾ことではなく、繋がりの想像的樹立は、具体的指示対象への経路の消滅のために、能記同士の水平の動機付けによってしか達成されないということなのである。

ところでノートにおいては、音と観念との虚構的結合は、客観的動機付けを持たずに、その結合関係を変動させてゆくものであった。「御ことば」(f27, 8, 2, 1, 14) と呼ばれる主観的動機付けは、なるほど人間の言語能力に関わるという点では主観的であり人間的であるが、それが個々の主体の言語活動を通時的かつ共時的に超越しているという点で、人間の中であって人間以上のものである。「御ことば」と言われる所以だ。御ことばが、「言葉の諸要素をして、言葉の散乱によって生じた御ことばの諸法則に従って合流し調和を取り戻すことを可能にする」(f8) と書かれた部分は具体性を欠けていたが、『英単語』では、歴史的事例の中で展開されている。イニシャルごとに意味や観念が法則化されるのは、もちろん単に語基語だけではなく、擬音語や間投詞も含まれる。しかしそれだけでもない。それだけならお国言葉の中の言語形成にとどまり、民衆による自然な言語形成や、学問的な派生によって形成された語が「民衆的な省略をこうむる」(1073) ように、自然な修正にすぎない。そうではなく、『英単語』が第三の形成を主題にしていたように、外国語から取り入れられた言葉もまた、お国言葉と相互に影響し合って法則化されるのである。実際、お国言葉の「語の意味とその外面的布置の間に実在する関係」を提示するはずの一覧表に、フランス語由来の言葉が多く混じっている。チェンバースに拠れば、romp、boil、bun、beak、woop は古フランス語を語源としており、また blow の縁語に含まれた flower、sneer の縁語の sparvin、pick の縁語の pocket に至っては、フランス語由来であるだけでなく、語形までもフラ

ンス語と酷似しており、マラルメ自身、fleur、épavin、poche とフランス語の意味を併記していることから考えて、おそらく故意に含めたものと思われる。このように、『英単語』の構成からすれば破格ではあるが、御ことばの法則が第三の言語形成まで含むとマラルメが考えていたと見てよいだろう。

結 論

19世紀の言語をめぐる学問的議論においては、自然科学と人文科学の対立だけでなく、生物学主義と人間学主義との対立があることは既に述べた。シュライヒャーやミュラーとは異なり、御ことばの中に斉一説を認めなかった (f8) マラルメは、言葉の展開の偶然性や創発性に重点を置いているように見える。こうした観点には、歴史意味論を提唱したブレアルの業績と通ずるものがある。彼は、人間の集団的知性によって言語がさまざまな形態で変化してゆく姿をいくつかの「知性法則」(意味の制限や拡大)によって説明しようと試みた。事実、マラルメも、英語によるフランス語の受容を「意味の変容」や「拡張または制限」(1045)といった言葉で指摘していた。ブレアルによる研究は、昨今の認知言語学の隆盛の中で再評価がなされている⁽¹⁰⁾。また彼は、言語が人間の集団的知性の産物であることから、社会内部の模倣関係や社会相互の影響関係を重視したが、ここに、音変化の歴史的偶然性を強調し、青年文法学派を批判したフーゴ・シューハルトとの接点がある。実際ブレアル自身、「音法則について」(1897)と題する論文で青年文法学派の批判を行っている(「言語と国民性」(1891)ではシューハルトの名前を好意的に引用している)⁽¹¹⁾。こうした趨勢は、結果的には、20世紀初頭にジュール・ジリエロンによる言語地理学の成果に結実することだろう。ただしマラルメは、生物学主義にも人間学主義にも単純には属していない。すでにこの時代には、因果法則か自由意志かという単純な図式は成り立たず、自然淘汰、集団的知性、無意識と様々な説明原理が提唱されていた。彼は、人間の中であって人間の意志以上の作用を「御ことば」「絶対的な意味」「神秘」「神性」と言った言葉で表現していたのだが、こうした一見神秘主義的な語彙は、上述のような19世紀の両陣営に巻き込まれずに特異なポジションを占めるためには、意味のあるものだったと考えられる。ところで19世紀は、言語学が、ソシュールに先立って、能記と所記の恣意性を発見した時代でもあった。恣意性の発見がかえって、ロマン主義文学における詩的言語の動機付けの問題を提起した側面があるが、マラルメの場合、クラチュロス主義的なレトリックを晩年まで残しているにせよ、動機付けの理想には拘泥していない。詩作という極度に言語への注意を要する活動の中で、語基語と擬音語との間の、歴史的ではないが論理的な繋がりを発見したことによって、むしろアトム的な動機付けから「繋がり」の構造的効果への移行や、人間内部の無意志的な創発性としての神性への着目が可能となったのである。

注

- (1) 例えばシェフェールは、トドロフと共に、水平の動機付け（能記／能記）、垂直の動機付け（能記／所記）、超越的な動機付け（能記／指示対象）のそれぞれが誤解（音と聴覚映像の混同など）や実現不可能であることを確認する一方で、ミルネールと共に、記号の恣意性自体が言語システムの中では必然や動機付けの効果を及ぼすこと、またこの恣意性が動機付けを退けると同時に単純に規約主義の側に立つものでもないことを指摘している。Cf. J.-M. Schaeffer, «Romantisme et langage poétique», *Poétique* 42, 1980, p.177-194.
- (2) G. Genette, *Mimologiques*, Paris, Éditions du seuil, 1976 ; T. Todorov, *Théories du symbole*, Paris, Éditions du seuil, P. Renaud, «Mallarmé et le mythe», *RHLF*, janv.-fév., 1973, p.46-68 ; J. Michon, *Mallarmé et Les Mots anglais*, Montreal, Presses de l'Université de Montréal, 1978 ; B. Marchal, *La Religion de Stéphane Mallarmé*, Paris, José Corti, 1988 ; D. Combe, «l'“idéalisme” mallarméen», Stéphane Mallarmé, Paris, PUPS, 1998, 27-43. Abréviation: SL = *La Science du langage*, F. M. Müller, trad. par G. Harris et G. Perrot, Paris, A. Durand et Pedone Lauriel, 1867. NSL1, NSL2 = *Nouvelles leçons sur la science du langage vol.1-2*, F. M. Müller, trad. par G. Harris et G. Perrot, Paris, A. Durand et Pedone-Lauriel, 1867-68. なお次のものからの引用は頁番号のみ記す。 *Œuvres complètes* vol.2, S. Mallarmé, éd. par B. Marchal, Gallimard, 2003.
- (3) シュライヒャーの言語観に関しては、*La Théorie de Darwin et la science du langage*, trad. par Pommayrol, Paris, A. Franck, 1868. ミュラーの言語観に関しては、SL, p.73-77. シュライヒャーの引用は *Die deutsche Sprache*, Stuttgart, Cotta, 1860, p.82.
- (4) Cf. P. Desmet, *La linguistique naturaliste en France (1867-1922)*, Peeters, Leuven-Paris, 1996, P. Desmet, *De la grammaire comparée à la sémantique*, Peeters, Leuven-Paris, 1995.
- (5) 例えば「(本書によって) 曖昧で危ういおぼろげな記憶の類はすべて真の〈記憶〉に変わるだろう」(948)、「記憶と知性の二重の努力」(949)、「言語の理論または知性的な記憶術とこれほど合致したものはない」(969)など。
- (6) ジュネット [1976, p.304] は、イニシャルの動機付けが説明不足だと言うが、文脈からしてマラルメの企図は動機付けではなくむしろ意味付けにあると見るべきだろう。
- (7) シュライヒャーはミュラーよりずっと巧妙に処理している。彼によれば、言語の起源の問いは、言語の観測に基づく言語の科学の範疇外であり、語根の創造は、直接的かつ自発的行為であり反省的行為ではないので、分析する余地はない。Cf. *Les Langues de l'Europe moderne*, trad. par H. Ewerbeck, Paris, Ladrang-Garnier, 1952, p.19-20.
- (8) 佐々木滋子氏が「虚構」を「言語の音声的側面と観念との関係」とする点に我々も同意するが、ノートの「虚構」は、直接に『英単語』のイニシャル一覧表の作成に関わる前に、まずは語根という概念を念頭に置いていたはずである。佐々木氏の論文ではその点が明示的に語られてはいない。Cf. 「マラルメの『言語の科学』」、『人文科学研究24』、1985、p.70-74.
- (9) Cf. Genette[1976] et E. Gaède, «Le problème du langage chez Mallarmé», *RHLF*, janv.-fév., 1968, p.45-65.
- (10) 客観主義で所記の自律性を尊ぶ構造主義意味論や論理の意味論に対して、主観主義で心理学的なアプローチという点で、歴史比較意味論は、認知意味論に近づけて論じられている。Cf. D. Geeraets, «Prototypicality Effects in Diachronic Semantics: A Round-Up», *Diachrony within Synchrony*, Frankfurt-am-Main, Peeter Lang, 1992.
- (11) «Des lois poniques», *Mémoires de la Société de linguistique de Paris* 10, p.1-11, «Le langage et les nationalités», *Revue des deux mondes*, 1891, p. 615-639.